幸福は外に現われる

辻　憲男（文学部教授）

人格は最高の幸福である、とゲーテは言った、哲学者・三木清は「幸福は人格である」と言う。人格は肉体であり精神であり、活動であり存在である、それは形成されるものである。「幸福になるということは人格になるということである」「機嫌がよいこと、丁寧なこと、親切なこと、寛大なこと、等々、幸福はつねに外に現われる」「単に内面的であるというような幸福は真の幸福ではないであろう。幸福は表現的なものである。鳥の歌うがごとくおのずから外に現われて他の人を幸福にするものが真の幸福である」（『人生論ノート』）。

三木清の故郷は“播磨の小京都”龍野。小説家の阿部知二は、姫路の旧制中学のころ、重い足を引きずって遠足に行った。…揖保川（いぼがわ）のアユ、そうめん、うすくち醤油はいかにも淡白繊細である、エネルギッシュな三木にも、一面そういう「繊細の精神」が宿っていた。三木は時代の良心を貫き、獄中に斃（たお）れた。この不幸な抵抗者の生を、後に阿部は長編小説『捕囚』に書いた。

『人生論ノート』は昭和16年（1941）の出版。ノートの背後にあったのは戦死者への思いか、あるいは一個の思想家の運命か。「愛するもののために死んだ故に彼らは幸福であったのでなく、反対に、彼らは幸福であった故に愛するもののために死ぬる力を有したのである」「彼の幸福は彼の生命と同じように彼自身と一つのものである。この幸福をもって彼はあらゆる困難と闘うのである。幸福を武器として闘う者のみが斃れてもなお幸福である」。

龍野城跡。たつのは三木露風「赤とんぼ」のふるさと。